

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K03029

研究課題名(和文) 小学校における宿題の教育的効果の縦断的検討と宿題を用いた学習指導の提案

研究課題名(英文) Homework, study habit, and academic achievement in elementary school in Japan

研究代表者

淡野 将太 (Tanno, Syota)

琉球大学・教育学部・准教授

研究者番号：20618532

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：小学校における宿題と習慣と算数の成績の関連を検討した。4年生時、5年生時、6年生時で宿題と成績の間に有意な正の相関はなかった。一方、4年生時、5年生時、6年生時で習慣と成績の間に有意な正の相関があった。また、4年生時の習慣と5年生時及び6年生時の成績の間および5年生時の習慣と6年生時の成績の間に有意な正の相関があった。4年生時、5年生時、6年生時における習慣と成績を用いて交差遅延パネルモデルを検討したところ、4年生時の習慣は5年生時の成績を予測し、5年生時の習慣は6年生時の成績を予測した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究では小学校においては、中学校および高等学校とは異なり、宿題を行なう時間および頻度と成績の関連がほとんどないことが示されていた。また、児童のストレスの増加など宿題を増やすことによるネガティブな影響も指摘されていた。本研究は、学業成績のみならず宿題で形成される学習習慣等も宿題の教育的効果と捉えることが可能であることに加えて、宿題と学業成績が学習習慣等の変数を媒介して関連する可能性を考慮し、それらの関連を時間を考慮した縦断研究によって検討した。

研究成果の概要(英文)：Present study examined the relationships between homework, habits, and math grades in elementary school. Result showed no significant correlation between homework and grades in the 4th, 5th, and 6th grades. However, there was a significant positive correlation between habits and grades in the 4th, 5th, and 6th grades. Furthermore, there was a significant positive correlation between habits in the 4th grade and grades in the 5th and 6th grades, as well as between habits in the 5th grade and grades in the 6th grade. When examining the cross-lagged panel model using habits and grades in the 4th, 5th, and 6th grades, habits in the 4th grade predicted grades in the 5th grade, and habits in the 5th grade predicted grades in the 6th grade.

研究分野：教育心理学

キーワード：宿題 成績 学習習慣 縦断研究

1. 研究開始当初の背景

宿題 (homework) は、教師から学習者に課せられる学校外で行う課題と定義される。例えば、国語の朗読練習や算数の計算ドリルを用いた演習問題などが例として挙げられる。

宿題の教育的効果に関する実証研究は、United States を中心に宿題と学業成績の関連を検討してきたが、その結果は一貫していなかった (for a review, Cooper, 1989)。宿題と学業成績に有意な正の相関を見出す研究がある一方、宿題と学業成績に有意な相関を見出さない研究、あるいは、有意な負の相関を見出す研究があった。

Cooper, Robinson, & Patall (2006) は、メタ分析を用いて幼稚園から 12 学年 (i.e. 高校 3 年) までを研究対象とした宿題の教育的効果を検討し、7 学年 (i.e. 中学 1 年) から 12 学年においては有意な相関があることを明らかにした。すなわち、宿題と学業成績の関連は学年によって異なることを示した。

Catalano & Catalano (2018) は、宿題の教育的効果は学習習慣等の変数を考慮して検討を行う必要性を指摘している。学業成績のみならず宿題で形成される学習習慣等も宿題の教育的効果と捉えることが可能であることに加えて、宿題と学業成績が学習習慣等の変数を媒介して関連する可能性がある。

宿題の教育的効果は学習習慣等の変数を考慮して検討を行う必要性を指摘する研究があった。学業成績のみならず宿題で形成される学習習慣等も宿題の教育的効果と捉えることが可能であることに加えて、宿題と学業成績が学習習慣等の変数を媒介して関連する可能性がある。

2. 研究の目的

小学校における宿題、宿題によって形成される習慣、および、算数の成績の関連を縦断研究で明らかにすることだった。相関分析を用いて変数間の関連を検討するとともに交差遅延パネルモデルを用いて変数による予測を検討する。

3. 研究の方法

小学校において 3 年間の縦断研究を行なった。小学校 4 年生を対象に調査を開始し、その後 2 年間調査を継続した。すなわち、1 年目の調査時点では 4 年生、2 年目の調査では 5 年生、3 年目の調査時点では 6 年生だった。分析では 3 度の調査における有効回答を用いた。4 年生時、5 年生時及び 6 年生時における 1 日あたりの宿題を行なう時間、宿題によって形成される習慣、および算数の成績の関連を検討した。

4. 研究成果

相関分析の結果、4 年生時、5 年生時、6 年生時で宿題と成績の間に有意な正の相関はなかった。一方、4 年生時、5 年生時、6 年生時で習慣と成績の間に有意な正の相関があった。また、4 年生時の習慣と 5 年生時及び 6 年生時の成績の間および 5 年生時の習慣と 6 年生時の成績の間に有意な正の相関があった。

4 年生時、5 年生時、6 年生時における習慣と成績を用いて交差遅延パネルモデルの分析の結果、4 年生時の習慣は 5 年生時の成績を予測し、5 年生時の習慣は 6 年生時の成績を予測した。

宿題の教育的効果を議論する際の教師が依拠することができる心理学的知見を提出した。日本国内の研究では、日本では宿題は学業成績以外の変数で教育的効果があると考えられているが、宿題は広く課せられているにも関わらず心理学的研究が行われていなかった。小学校学習指導要領解説 2017 年総則では「小学校教育の早い段階で学習習慣を確立することは、その後の生涯にわたる学習に影響する極めて重要な課題であることから、家庭との連携を図りながら、宿題や予習・復習など家庭での学習課題を適切に課したり、発達の段階に応じた学習計画の立て方や学び方を促したりするなど家庭学習も視野に入れた指導を行う必要がある。」とあるように、学習習慣等の育成を考慮して宿題が捉えられている。しかし、提出されている知見は、教師による効果測定を行わない教育実践の報告や経験に基づいた工夫の提示に留まっており、心理学的知見は提出されていない。

引用文献

Catalano, H., & Catalano, C. (2018). Quantitative study on the usefulness of homework in primary education. *LUMEN Proceedings*, 3, 129–136. <https://doi.org/10.18662/lumproc.nashs2017.11>

Cooper, H. (1989). *Homework*. White Plains, New York: Longman.

Cooper, H., Robinson, J. C., & Patall, E. A. (2006). Does homework improve academic achievement? A synthesis of research. *Review of Educational Research*, 76, 1–62.

<https://doi.org/10.3102/00346543076001001>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 淡野 将太・浦内 桜・越中 康治	4. 巻 103
2. 論文標題 小学校教師の宿題研究に対する認識	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 琉球大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Urauchi Sakura, Tanno Syota	4. 巻 -
2. 論文標題 Homework and Teacher: Relationships Between Elementary School Teachers' Beliefs in Homework and Homework Assignments	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpr.12412	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 淡野 将太・浦内 桜・越中 康治
2. 発表標題 小学校における宿題と国語，算数，理科および社会の成績の関連
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 淡野 将太・浦内 桜・越中 康治
2. 発表標題 小学校における宿題と算数の成績の関連
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	越中 康治 (Etchu Koji) (70452604)	宮城教育大学・大学院教育学研究科高度教職実践専攻・准教授 (11302)	
研究 分担者	CHUANG Chiching (Chuang Chiching) (10834343)	琉球大学・教育学部・外国人研究員 (18001)	2021年度中にUniversity of Taipeiに異動

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------